井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

2023年6月25日

図103

（前回の報告のあと、すでに２回現場に行っているのだが、報告書の執筆が追いついていない。とりあえず現時点の状況に追いつかせるため、体裁を気にせず、当時のメモをもとに筆が動くのに任せて書いていくことをお断りします）

５月１５日

＊アトリエをでて13時50分つつじヶ丘駅発、急行本八幡行きに乗る。一人用テント、寝袋、マット、着替えとパソコンが詰まったリュックを持ち、初めて電車で現場に向かう。朝から雨。前回の報告書の送信予約をして、もろもろの準備をしていたら昼過ぎになってしまった。なんだかどきどきする。どこかに発つには中途半端な時間だなと考えたりもしたが、これは「私の時間」なのだ、と思い直した。つまり、一日が何時に始まろうが私の勝手なのである。

２回の乗り換えを経て１６時２３分日向駅に到着。降りた瞬間、駅を間違えたかと思った。車で来たときと街の印象がぜんぜん違う。理由はわからないが、車よりもすこし視線が低いことが関係しているかもしれない。駅前に並ぶ古びた建物たちが、目の前に迫ってくる感じがある。錆びた看板や崩れた壁や壁のヒビがいちいち目につき、衰退しつつある街という印象が、車よりも強い。

他に数人降りていたが、みんな迎えの車が来ていた。車は駅から出てきた人を乗せ、どこかに去っていった。たぶん家に帰るんだろう。駅から現場までの１０分弱のあいだ、歩行者は一人も見かけなかった。何台か車とはすれ違ったが、いくら車が走っていても、歩行者がいなければ人が住んでいる感じがしない。そういう意味では、車は空き家と大差ない。

井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

2023年6月25日

＊現場について愕然とした。すっかり伸びた草たちのせいで、倉庫（兼太陽光発電所）は屋根しか見えないような状態で、掘り途中の井戸は完全に草に埋もれている。土地を買うことの責任というか、もう私はこいつらと一生付き合っていくしかないんだなということを思い知らされた。すごいものに手を出してしまった。ブルーシートを突き破ってる奴もいる。おまけにもう蚊が飛び始めていて、気温は25度を超えている。

＊まず草刈りから始めなければ、なのだが、もう夕方だし移動で疲れたしで明日やることにして、今日はもうお風呂に行って寝たい。だが問題は、「テントは張られなければならない」ということだ。でないと寝る場所がない。しかし絶望的なことに、敷地いっぱい草がぼーぼーに生えている。ということは、テントを張るエリアの草刈りだけは、結局いますぐにやらなければならないのである。私は衝撃を受けた。つまり、疲れたので草刈りは明日にして眠りたいのだが、草を刈らないと眠れないのである。これから鎌を取りに、この草をかき分けて倉庫まで行かなければならない。さいわいすでに作業着なので着替える必要はないが、もし作業着を着てなかったら……なんてことをうだうだ考えながら、たばこを吸いつつ、敷地の前を何度もうろうろしてしまった。アホだと思った。

ようやく決心を固め、草を踏み分けて倉庫まで行き、鎌と枝切り鋏を取り、テントを張るのによさげな場所を見繕って草刈りを始めたとき、ふと、誰にも頼まれてないのに一人でこんな土地を買って、草を刈って、テントで寝ようとしている状況がおかしくてたまらなくなってしまい、ひとりで「ハハハハ」と笑っていた。私はここ１０年ほど、ずっとこんな調子で「ハハハハ」と笑いながらやってきたし、今後も「ハハハハ」とやっていくのだろう。

羽のないタイプのゴキブリがコンクリートブロックとブルーシートの間から大量に出てきてギョッとしたが、テントの中までは入って来れないから大丈夫、と気を取り直し、今夜はご近所同士よろしくたのむよ、と声に出して挨拶をすませた。

５時ごろにテントを貼り終え（図103）、おなかがぺこぺこだったのでとりあえず「まんまや」へ。

＊「まんまや」にきた。今日はジャズが流れている。いつものおばちゃんが「帽子すてき」と、ふふふと笑って褒めてくれた。「ありがとうございます」と言ったら、「この間も被ってたでしょ、素敵な帽子」とおばちゃん。よく覚えてますね。ふふふ。

顔いっぱい笑顔になっているのが、マスクごしでもわかる。以前ここに来たのは2ヶ月前のはずだが、おばちゃんは覚えてくれていた。常連に一歩近づいたみたいで嬉しい。ほんとうに嬉しい。「までい牛唐揚げ定食」（上の図）を食べる。

帰り際におばちゃん、「気をつけてね、毎度」と言ってくれた。「またお待ちしてます」と。裏の滝口さんに続いて二人目の話し相手ができたかもしれない。

井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

2023年6月25日

＊コンビニに寄って、水と明日の朝食用のパンと「和菓子アソート」を買い、現場に帰ってきてテントに入り、ちょっとだけメモをまとめる。アーティストの加藤さん（報告書四号参照）から着信。報告書が届いたので電話してみた、とのこと。嬉しい。テントの中で少々ダベって寝る。

５月１６日

＊８時半に行動開始。すぐに致命的なミスに気がつく。電圧の変換器を忘れた。ソーラーパネルで発電して車載用バッテリーに充電した12Vの電力を、一般家庭用の電圧（100V）に変換するもので、いつもは車に置きっぱなしにしているのだが、リュックに入れ忘れた。つまり、草刈機を充電することができない。

仕方がないので草刈機に残っていた電力で草を刈り、しかしすぐに充電が切れてしまったので鎌を使って人力で刈り、敷地の半分ほどまで刈り終えたいったところで九時半。もう疲れた。GoPro用の三脚も忘れたので綺麗に撮影もできない。おまけに腹が減っているせいか、くしゃみがとまらない。体調が悪すぎて笑える。

＜とつぜんの体調コラムコーナー＞

私は以前「ミシマ社」のウェブマガジンで「顔面の住人について」（https://www.mishimaga.com/books/jibunnochizu/003680.html）というタイトルで、自分の鼻について書いたことがある。

> **（前略）この相棒はめちゃくちゃ病弱で、僕が強固な意思で物事に臨んでいるときも、それとは無関係にくしゃみをして僕を邪魔してくる。最も酷いときの傍若無人ぶりは、本当に自分の鼻なのかと疑ってしまうほどだ。顔の真ん中に他人が家を建てて住んでいるかのように、鼻水をどんどん垂らしてくる。しかし僕はこの鼻と三十三年間を共に過ごしてきた。僕は大してものを知らないし、スゴい文章も書けないし、年収はたぶん平均の半分以下だし、そのくせ酒も煙草もやめられない化石のような人間で、浮き沈みの激しいどうしようもないポンコツだが、この鼻に関してだけは世界的な第一人者であると言っていい。（中略）**
>
> **厄介な相手ではあるが、それでも長年連れ添っているうちに僕は彼をすこしずつ理解できるようになってきた。最近はむしろ、この弱さは彼の長所なのではないかと思えてきた。ちょっと付き合っただけでは到底わからないのだが、彼はある種の役割を果たしてくれているのだ。それはセンサー機能である。彼は体のどの部位よりも真っ先に、僕の体調の変化に反応する。寝不足だったり、疲れていたり、ビタミンAが足りなかったり、ビタミンBが足りなかったり、ビタミンDが足りなかったり、思い通りのものが書けずにいらいらしていたり、抱えている作業がキャパシティを超えたときなどに、水を垂らすことで僕に知らせてくれる。恐るべきことに、最近便秘気味ですよと教えてくれることもある。鼻と腸の相関関係が科学的にどの程度解明されているのかは分からないけれど、これは事実だ。僕は自分が疲れていること、栄養が足りていないことを、彼が垂らす水を通して自覚する。床に落ちた水の跡で家の雨漏りを知るのと同じように。**

このときははっきりと認識していなかったが、最近は空腹になるとくしゃみを出す傾向があることがわかってきた。その理由としては以下のふたつが考えられる。

①圧力説

空腹ということは体に何も詰まっていないということである。つまり内圧が低い状態なので、外圧（気圧とか湿度とか花粉濃度とか）に押され気味になり、その劣勢を瞬間的に跳ね返そうとしてくしゃみが出る。腹に何かを入れると内圧が上がり、その圧力が外圧と拮抗すると、くしゃみがとまる。世界と私の力の均衡が崩れているときのサインがくしゃみなのである。

②体温説

空腹ということは体温が下がっているということである。すると、私の体内にいる、私にとって必ずしも好ましくないものたち（病原菌とかウイルスとか）が、ほんのすこし活動的になる。私の鼻はそれを排出しようとしている。

どちらも、私の体が環境に負けそうなときのセンサーという点では共通している。空腹と鼻の関係という新たな切り口については、今後も観察を続けていきたい。

井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

2023年6月25日

図104

＊草刈り作業を中断し、井戸掘り作業へ。井戸枠を覗いてみると、奥の方に水面が見えた（図104）。水面までの深さは約1700mm。だいたいこのあたりの水位で安定している。もう掘らなくても水は出るんじゃないかとも思ったが、他にやることもないので掘った。

＊７ｍ９０cmまで掘ったところで、ふと「井戸掘りはもうやめだ！」と思い、やめた（左図）。「もうやめなさい、そろそろ次のことをやりなさい」という声が聞こえた。塩ビ管で地面を掘るのは、他に何も考えなくていいし、ちゃぷちゃぷという音も心地よいし、永遠にやっていられるのだが、いつまでもこんなことを続けているわけにはいかない。慣れた作業を続けるのはぬるま湯に浸かっているようなものだ。ずっとちゃぷちゃぷやっていたい自分もいる。しかし人は前に進まなくてはいけないときがあり、それは今なのである（前にもこんなことを書いた気がする）。三島由紀夫の『金閣寺』で主人公の修行僧の目の前に金閣寺が出現するときのように、私は頭の中に「村上勉強堂」を出現させ、井戸掘りを中断した。このプロジェクトの目的は井戸を掘ることではない。それを思い出す必要がある。もっと掘れば飲み水になるかもしれないが、それを目指してしまうと何ヶ月かかるかわからない。発酵と気化熱を利用するために水分が欲しかっただけである。思えば最初にスコップを入れたのは今年の１月１９日、冬の真っ最中で、私はダウンを着ていた。あれから４ヶ月が経った。こんだけ掘ったんだから、もう十分だろう。

井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

2023年6月25日

図105

＊次は井戸本体をつくる。２５mmの塩ビ管の底を塞ぎ、園芸用の寒冷紗を６０cmほど巻いて結束バンドで止める（図105）。寒冷紗は汲み上げる水のなかに砂が入るのを防ぐ役割があり、Youtubeでいくつか実例を見たが、寒冷紗が一番安価で使いやすそうだった。

図106

図107

＊２５mmの塩ビ管を８mぶん繋げて、楽天市場で「井戸ポンプ」というキーワードで検索して出てきた3000円の井戸ポンプに接続し、木材で高さを出して、仮の姿ではあるが、いちおう井戸が完成した(図106)。

＊コンビニで買っておいたミネラルウォーターを呼び水として中に入れ、バーを上げ下げすると茶色い水が出てきた（図107）。出しているうちに水はすこしずつ透明になっていき、このまま続けていれば綺麗な井戸水が手に入るかと思った（掘ったばかりの井戸は、最初にかなり大量の水を出さないと透明になっていかないのだと、Youtubeで見た）。しかしすぐに水が出なくなってしまった。８mでは安定した水量を確保するのが難しいのかもしれない。とりあえず様子を見ることにした。

＊目的を達成し、19時32分日向駅発の電車で東京に帰る。日向駅はちょうど帰宅ラッシュの時間帯で、見たことのない数のスーツ姿の人々や制服姿の学生たちが電車から降りてきて、一部は車に、一部は自転車に乗り、残り数名は徒歩で、それぞれの夜道に消えていった。

井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

2023年6月25日

６月１３日

＊再び現場へ。今度はファントム（自家用車の軽バンのこと。「ファントム」と名付けている）で向かう。９時２０分アトリエを出発。先週から梅雨入りして昨日までずっと雨続きだったが今日は晴れている。雲間から太陽の光が差し込んでいる。現場に調理道具をおいたほうがいいんだろうなと、甲州街道を走っているときに思った。

＜とつぜんのコラムコーナー＞

いまの「勉強堂」はまだ非日常の場所なので、これを日常空間に持ってくる必要がある。それはつまり「その場所のことをやる」のではなく、「その場所でなにかをやる」ということだ。例えば、料理はその代表例である。

「場所のことをやる」と「その場所でなにかをやる」、この行き来こそが、私がこのプロジェクトで大事にしたい核かもしれない。日々の生活に慣れてしまうと「その場所のことをやる」つまり、「自分が住んでいるということそれ自体について考える」ことを忘れがちになる。食事と睡眠という、ただでさえこなさなければ死んでしまう業務を抱えながら、それに加えて労働やらなにやらをして日々お金を稼がなければならない私たちが、自分の体が、いったいどのようなシステムによって支えられているのか、なんてところまで考える余力がないのも無理はない。日々の生活で一杯一杯で、政治のことまで考える余裕なんてない、という現象に似ている。だから、私はそれをやる。

「その場所で生活する」ことと同時に、「その場所を生活する」こと。あるいは「その場所を引き受ける」こと。そのためにも生活の重心を移し、過ごす時間をふやすこと。

ここで「料理」がキーワードになる。私は例えば「仕事X」をやろうとするときに、なんの準備もせず本命の「X」をいきなり始めてしまうところがある。そして準備不足や、実際的な作業にたどり着く前にやらなければいけないことが出てきてやる気が削がれ、気持ちが乗らなくなって結局仕事が進まなかったりする。そうではなくて、Xを始める前に、Yを準備して、そこでZという気持ちを醸成させて、Xに臨むようにする、ということを覚えた方がよい。料理はその練習になる。

今回の滞在では簡単なコンポストトイレ（仕事X）を作ろうとしているのだが、そのためには木を切ったり、雨の中でも道具が濡れないような、作業場所（準備Y）をまず作るのが大事である。つまりトイレを作る前に、その準備として単管パイプと木で作業テーブルをつくり、それからタープを組み立て、雨に濡れない場所を設える（そのためのものを、今回は持ってきた。「あることを成すための、その前の準備をするための材料」を持ってきたのである。すごい進歩だ。えらい。えらすぎる）。

いきなりトイレを作ることもできなくはないが、テーブルも屋根もない雨の中で木材を切ったりするのは（いろいろと気を回さなければならないので）結局時間がかかる。つまり、トイレ制作にあてられる時間を差し引いてでも、テーブルと屋根をつくったほうが早い、ということである。またテーブルを作ったことによる「気持ちの高まり」という効果もバカにできない。もしかしたら時間の節約うんぬん以上に大事な要素かもしれない。制作の準備のための準備をすることで、トイレ作りに向けて気持ちが乗ってくる、という効果を狙う。どうやら、私たちはそのような遠回りをしないと作業に集中できないという性を抱えているらしい。

おどろくべきことに、私はこの事実を34歳になるまで知らなかった。私は混沌という名の沼を愛しているが、秩序のレールに自身の体を乗せてあげたほうが「健全なやる気」が出てくる、ということがあるらしいのである。うすうす感じてはいたが、ほんとうにそうらしいのである。

私はこのことを「料理」から学んだと言える。最近家のキッチンが整ったこともあり、料理をする機会が増えた。多い時は一日でバスク風チーズケーキと、カレー２種と、カレーに使った和風出汁のだしがら（昆布と鰹節）とにんじんとスナップエンドウを使った佃煮と、大根を出汁で煮ただけのやつと、塩だけで味付けしたダルスープ（数種類の豆を半日浸してから１～２時間煮込んだスープ）を作るくらいには料理をしているのだが、これが制作リズムの調整に大変重要な役割を果たしている。

料理とは、そのときの気分、冷蔵庫の中身、かけられる時間などの外的要因（これを「コール」と呼ぶ）を受け、そのうえで暫定的な解を導き出す（これを「レスポンス」と呼ぶ）営みであり、この「コールアンドレスポンス」が、脳みそを受動的/消費的なモードから、能動的/制作的なモードへと切り替えてくれる。料理中は次々とやることが出てくる。お湯を沸かし、その時間を利用してニンニクを刻み、スパイスを火にかけ、出汁の味見をし、冷蔵庫からバターを取ったときに忘れていたマンゴーの存在を思い出し、急遽手羽元のマンゴー煮を試すことに……などとバサバサ作業をこなしていると、すべての調理が終わり、片付けが終わったあともその気分が自然と続き、「さて、次はなにをつくろうか」と、制作モードにスライドできる。

作家を続けるために必要な能力は、自分の面倒を自分で見る力だけだ、と誰かが言っていた気がするが、私は作家生活12年目にしてようやくそのことに気がついた。

井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

2023年6月25日

なんだかずいぶん遠回りしてしまったが、上記のことが頭をかけめぐり、「調理道具を勉強堂の現場においた方がいいな」と思ったのである。

また上で述べたXYZの話と似たような理由から、いつもは高速代をケチって利用しない首都高に乗り、今回はすべての道程で高速を使うことにした。なんというか、お金をかけられるところにはかけるようにしてみよう、と思った。経済的には正直厳しいが、だからこそ逆にお金をつかってやろうと思った。むこうできっちりと、理性的に作業するためにも、ケチるのはやめる。

＊といいつつ、首都高だけで1590円という数字を見て胸に痛みが走る。

＊首都高、映画監督のヴィム・ヴェンダースがいつかのトークイベントで、「ビルの上半身のあいだを駆け抜けていく景色が大好きだ」みたいなことを言っていたが、それはタクシーに乗っていたからこその余裕だったのだろう。自分で運転するとよくわかる。首都高は怖い。よほど慣れていなければ、とうてい景色をのんびり見ている余裕はない。合流の際の時間的猶予は通常の高速の半分以下しかないし、車はばんばん割り込んでくる。そのうえ、木下グループ、笹塚ボウル、カーナビアプリはナビタイム、みたいな広告の文言が激流のように流れ、集中量を削ってくる。それに加えて標識の量も尋常ではない。わずか一分間で

【危険物 この先中央環状線方面　高さ3.8m超↖　高さ3.8m超↖　新宿出口の先④　渋谷 西池袋 湾岸線C2 E4東北道③⑤ ④新宿出口 C1都心環状　3.8m超　東北道↖　この先中央環状線方面　湾岸線↖　山手トンネルドアミラーくもり注意　㉚この先100m　渋谷 西池袋 湾岸線C2 E4東北道③⑤　西新宿ジャンクション　急カーブ注意 R40m 減速　ドアミラーくもり注意　非常電話SOS　↖新宿出口左へ　東京都庁 新宿副都心　新宿Shinjuku 出口EXIT 200m 404　新宿出口の先④　速度注意　↖新宿出口左へ　150m先急カーブ　↖新宿出口左へ　新宿Shinjuku 出口EXIT 404　④次はNext 外苑 左出口402】

これだけの文字情報が迫ってくる（あまりに多いので動画を撮って書き出してみた）。こんなものをぜんぶ読める訳がない。なにを考えているのだろう。いくらなんでもやりすぎではないか。これは親切心というよりも、なにか病的なものを感じる。文句を言われた時のためのリスク回避という側面が強く出すぎている。

ここで一つの仮説が思い浮かぶ。つまり、なにも考えずに看板をひたすら設置することは、看板をひとつも設置しないことよりもむしろ野蛮なことなのではないか。哲学者のジョルジョ・アガンベンが『裸性』（平凡社）という本の中で、ドゥルーズの「権力」の定義を紹介しており、それによると権力とは「しなければならないことを強制する」というよりもむしろ、「しないでいられることを人々から奪う」ものだという。だとすると、逆説的ではあるが、看板を置くことよりも、むしろ看板を置かないことのほうが、高度な行いなのではないか。つまり、動物的な本能としては「危なそうなところにはどんどん看板をおきたくなる」し、それに従うことは簡単である。でもそれをしないことを選ぶことこそが「人間的な能力がある」ということなのではないか。

＊首都高はやがてビルの間を走るのをやめ、浦安ICあたりからは空を見せられることになる。防音壁に左右を囲まれ、あとは道路と空があるのみ、という風景である。まことにつまらない。無機物というものは、どうしてかくも解像度の低い表面をしているのだろう。そこには見る喜びがない。いくら注意しても、視線は壁の表面を滑っていく。それは何も見ていないことに等しい。だが東金道路に入ったあたりから、防音壁が緑の木々に変わり、すこしはましになる。有機物たちは無機物と違い、すべての表面に目を留めるに足るポイントがある。表面の箇所ひとつひとつの中に、さらに細かい世界がひろがっていることが、高速で走りながらでもわかる。そこでは視線は滑らない。たくさんのものは必要ない。一本の枝、一枚の葉っぱを見ているだけで、世界がいかに複雑にできているかを実感することができる。

井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

2023年6月25日

＊山武成東ICで高速を降り、1230円を支払った。高速を降りてすぐ、そこに広がっている田んぼや、雑木林や、川や、小高い丘を見て、（馴染みの風景ではあるのだが、今日は特に）すべての「表面」が緑に覆われている、と思った。私たちは、この緑の表面の隙間を縫うように暮らしている。

５０年ほど前に、経済成長と人口増という社会的な背景のもと、いくばくかの夢と希望とともに宅地開発がなされた土地。しかしその後人口減少の時代に入り、いまではこの地は、植物たちの進撃を少ない人々の力でぎりぎりとどめている、という印象。スイカズラの蔦が古い断頭台に絡むように、私たちは高度成長期の遺産の残り香に包まれながら暮らしているということが、ここにいるとよくわかる。次に来た時は、市の図書館で山武市周辺の市街化の歴史を調べたいと思った。

イアン・ハミルトン・フィンレイ(1987)
《Both the garden called 'sentimental', and the French Revolution, grew from Rousseau. The garden trellis, and the guillotine, are alike entwined with the honeysuckle of the new 'sensibility'.》

＊11時半、現場近くのセブンイレブンに到着。長ネギの味噌汁と納豆巻きを食べる。どうしても、納豆巻きを選んでしまう。

＊現場に到着して早々、清潔なチャバネゴキブリみたいな虫二匹（自宅で遭遇するゴキブリは「虫」というよりも「ゴキブリ」である、という感じがするが、ここにいるのはあくまで「虫」という印象を持った。なので、それほど嫌じゃなかった。なぜだろう）と、カメムシ一匹が車のドアに飛びついているのを発見した。歓迎されているのだろうか。

井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

2023年6月25日

図108

＊現場を見て、時計塔を立てた方がいいかもしれない、と思った。その時計は、現実の時刻と対応していなくてもいい。むしろそれとは全く関係がないほうが好ましい。私にしかわからない時刻。この土地と私とを、社会という外部に干渉されることのない、一対一の関係にしてくれる時計。

＊作業場所の仮設をする（左図）。場所Aを作るためには、それを作るための場所Bがあったほうがよい、という結論に先ほど辿り着いたところだが、そうするとそれを作るための場所Cも必要になってくる。するとそれを作るための場所Dが……という無限退行に陥ってしまうので、どこかで「場所を作らない」という決断をする必要がある。

つまり「この資材は土の上に置く」と決め、退行を止めなければならない。草を刈るためには、まず草の中へ踏み入らなければならないのと同じように。

車から木材やら機材やらを土の上へ。次に単管パイプを組み立てて作ったテーブルの上へ、という具合に。

いったい私は何をやっているんだろう。

井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

2023年6月25日

＊作業準備を終え、先日掘り終えた井戸を見ていたら、小さな男の子をつれた妙齢の女性が敷地前の道路にやってきて、草花を観察しはじめた。二人とも手ぶらで、近所からぷらぷら歩いて来た、という雰囲気。おきまりの散歩コースらしい（この親子は、以前私が滞在していたときも、テントの中にいる私に気がつかず、同じところで草花の観察をしていた。「あれ、だれかキャンプしてるのかな」「だれか寝てるのかな」という会話をほんの１メートルの距離で聞きながら、私は物音を立てないように丸まっていた）。

女性のほうが私に気がつき、にこりと笑って「こんにちは」と声をかけてくれた。挨拶を返すと「家作るんですか？」と聞かれた。

「家というか、小さな小屋を作ろうかと思って」

「いいですね。わたしたちも、女だけで小屋作りました。小屋づくり楽しいですよね」

「へえ。この近所にですか？」

「いや、森の中に。ちょっと倉庫が欲しくて」

「いいですね」

二人は咲いている草花の名前について話しながら去って行った。教えてもらえばよかった。

＊草刈りと作業場所の整備だけで一日目が終わった（図108）。

＊ファントムで「千葉レンタル東金営業所」（建設機械の貸し出しをしている会社）へ行った。ユンボの貸し出しについて聞くために。めちゃくちゃ感じのよい会社だった。スタッフが二人いたのだけど、（みるからに素人っぽい雰囲気で、しかも法人ですらない）私のことを下に見るような態度をいっさい取らず、誠実に対応してくれた。スタッフの一人が「新規の紙どこやっちゃったけな」と棚をごそごそ探し、A4サイズの書類を一枚差し出し、極めて丁寧な口調でこう言った。

「もしお時間ありましたら、こちら記入していただいて、一週間くらいですかね、審査させていただきますので、この電話番号のほうにご連絡いたします。個人、ですよね。ここにお名前と、電話番号と、あればファックスと、ご住所を」

この会社は回送（貸し出す機械を現場まで持ってきて、終わったら持ち帰ってくれる）もやっている。回送してもらえなければ、いくらユンボを運転する免許を持っていても（私は３トン未満のユンボの運転免許を持っている）、ユンボを現場まで運ぶ２トントラックの免許をもっていないので、意味がない。

しかし、法人ならわかるけど個人を審査するって、いったいなにをどう調べるんだろう。

＊帰り道、私が世界で一番好きなコメリホームセンターの最強種である「コメリパワー（大網白里店）」まで行き、充電式ディスクグラインダを買ってしまった。13000円（本体のみ）。コンセントタイプのグラインダは持っているのだけど、現場の電力（12Vの車載用バッテリー）では使えなかったので。近いうち現場で「駐車場」を整備するための、コンクリートブロックの切断に使う。それと、あちこちのブロックから飛び出して草刈りの邪魔をしてくる鉄筋の切断にも使える。他に、グラインダ用のダイヤモンドカッター、農作業帽子、ピンコロ8個、コンクリートブロック４個、チオビタドリンク（３本入）を買った。チオビタドリンクは、成分のタウリンがマウスの寿命を大幅に伸ばしたという実験のニュースをネットで見たので影響されて買ってしまった。

残念ながら、コメリホームセンターの歌を店内BGMで聴くことはできなかった。

井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

2023年6月25日

ハイライト１：歌うおじさん

＊それからお気に入りの銭湯「松の湯」へ行った。２台しかない駐車場が空くのを待っているあいだ、すっかり日が落ち、薄暗い一方通行の住宅街を高校生グループが次々通り過ぎていった。二人組もいれば、１０人近いグループもいる。わいわいと、あるいはもくもくと家に帰っていく。

＊完全に夜になってしまったときよりも、空がまだすこし明るい時間帯のほうが、道が暗く感じることがあるな、と思った。などと書いてたら銭湯から見るからに湯上がりホクホクの人が一人でてきて、路駐していた車に乗り込み、走り去っていった。その手があるのか……。と書いてたらまた人が出てきて、駐車場があいた。

＊番台で５００円を支払い、寡黙なおじさんから２０円のおつりをもらい、服を脱ぎ、他に誰もいない静かすぎる風呂場に入って体を流し、湯船に使ってまもなく、

「かゆいかゆいかゆい・・・」

とつぶやきながら、４０半ばくらいで顔がつるりとしているおじさんが入ってきた。

おじさんは、キッチンでスポンジを泡立てるときに出る音に極めて近い音を出しながら顔をごしごし両手でこすり、一通り体を流して風呂に浸かった。しかしものの数分でおもむろに立ち上がったので、湯船から出るのかと思ったのだが、おじさんは「もうすこしはいっておこう」とひとりごちて湯船に戻った。ドラマの予感がする。

おじさんはまもなく湯船から立ち上がり、洗い場に座って、またスポンジの音を出しながら体を洗い始めたのだが「かゆいかゆい・・・」という独り言がとまらない。どこがかゆいんだろうと思うながらも、私は目をつぶってじっとお湯に浸かっていた。突然、おじさんが手を止め、

「かゆい！」

と、はっきりと声に出して言った。それからまた「かゆいなあ」。まるで誰かに「大丈夫ですか」と聞かれるのを待っているかのような口調。風呂場には僕とおじさんしかいない。これは、なんか話しかけた方がいいやつかなあ、でもちょっと苦手なタイプだなあ、とか考えていたら、おじさんは突然歌い出したのである。

「ちんこかゆいな。ちんこ〜〜かゆいな〜〜」

やばすぎる。私は目をつぶって聞こえていないふりをして湯船に浸かるしか、それしかできることがなかった。話しかけないでよかったと思った。

一度歌っただけで、おじさんはそれから無言になった。私はのぼせる直前まで湯船につかり、体を洗って、おじさんの後に脱衣所に戻った。おじさんは銭湯を出るとき、「またくるねー！」と番台さんにめちゃくちゃでかい声で挨拶し、帰っていった。またとんでもないキャラに出くわしてしまった。

＊銭湯を出るとき、出入口の引き戸に

わ
す
れ
も
の
ヤダ

と書いてあることに初めて気がついた。（「ヤダ」のみ赤い文字）。松の湯、底が知れなさすぎる。

井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

2023年6月25日

＊ジョナサン東金店で晩御飯。ハンバーグ＆ガーリックピラフを注文。洗面所に手を洗いに行き、ドリンクバーコーナーで水を取り、席に戻ってPCを開いて[すかいらーくグループWiFi]につなぎ、携帯にメモした内容とPCにメモした内容を同じテキストデータにまとめているうちに、陽気な音楽とともに、車輪移動をする白い棒状のロボットが近づいてきて「ご注文ありがとうにゃん」と話しかけてきた。猫っぽい顔面が黒いディスプレイに表示されている。「ネコちゃんロボットがお料理を運ぶ場合もあります」とテーブルに書いてあるので、こいつがそれなんだろう。ネコちゃんロボットの体内には棚が数段あり、そのうちのひとつに私が注文したピラフが載せられている。ありがとう、といちおうお礼をして取ると、ロボットはまた陽気な音楽を垂れ流しながら去っていった。

　ピラフの実物が、メニューのイメージ写真に忠実で驚く。小鉢に入ったカレー風味のソースはまあおいしかった。ハンバーグは作り慣れていないからわからないけど、ガーリックライス、目玉焼き、サラダ（のドレッシング）は、自分のほうが美味しく作れるなと思った。

　平日の８時半。明るくて清潔感があり、広々として、やたら冷房が聞いている店内。席数に対して客が少ない（私の他に5組くらいしかいない）。

「６時じゃない？」

「６時、５５分」

「それだね」

「遠いからね」

と、隣の二人組が話している。かすかなBGMの音量と、より大きなエアコンの風の音。風呂上がりの体が冷えていくのがここちよい。エアコン。まだ六月の中旬だというのに、温室効果ガスである合成化合物（代替フロン）に載せて室内の熱を屋外に排出し、必死に室温をさげなければ快適に食事ができないほど暑い、ということになっている。この、「ということになっている」というのが問題だ。

＊帰り道。現場付近で見かける看板のデザイン、ほとんどすべて昭和のころにできたものなんだろう。道では高校生くらいの子をたまに見るけど、ほとんどは高齢者で、そうじゃなくても３０～４０代以上のひとたち。４０年くらい前にできた、この街で育ったひとたち。そのもっと前はどんな場所だったのか。お祭りとか自治会はあるのか。気になる。

井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

2023年6月25日

６月１４日

車内に敷いたマットでごろごろとビールを飲みながら携帯で「マイホームヒーロー」という漫画を読んでいたら寝落ちしていた。７時に目が覚め、７時半に行動開始。車でセブンまで行く。朝は車の通りが昼とは比べ物にならないくらい盛んで、交差点での合流に苦労する。コンビニで小便をして顔を洗い「ホタテやカニのうま味広がる　春雨スープかきたま」を買ってレジ横でお湯を入れ、車のドリンクホルダーに指して現場に戻り、春雨をすする。昨日買っておいた「つぶつぶコーンマヨネーズ」（パンの名）は後で食べることにする。自炊したいが、なにぶん環境が整っていないので無理。料理をするには、なによりもまず「屋根」が必要だということを痛感する。この現場に足りないのは、なによりも屋根なのではないか。仮設してしまってもいいかもしれない。

＊簡単なコンポストトイレをつくりはじめる。これから何をするにしても、まずトイレが必要だろうと思い、今回の滞在の目標をトイレの制作とした。匂い対策として念の為、設置場所は裏の家から一番離れている道路側とした。

まず昨日買ったピンコロ（四角いコンクリートブロックに金属の板がついたもの）を４つ、横90cm縦160cmの長方形で、かつピンコロ同士に高低差ができないように水平器で水平を見ながら地中に埋める（左図）。これだけで１時間半かかった。この土台作りが一番大事で、これさえできればあとはその上に木材を組んでいくだけである。

＊土の中からコガネムシの蛹のようなものを掘り出してしまい、慌てて別のところに穴を掘って埋めた。

他にも今回の滞在で、カマキリの子供やコガネグモの夫婦などを見かけた。だが、一番目についたのはカタツムリだった。カタツムリ王国だった。梅雨を感じた。

いずれこの敷地に住む生き物の図鑑を作りたいと思った。虫だけでなく、植物やきのこも含めてイラストにしてまとめたい。それと敷地内に生えている食べられそうな草を一通り食べ、食レポを書いてみたい。

＜虫が苦手なひとは注意！＞

コガネグモの夫婦。左下の黒くて小さいのがオスで、しましま模様の大きいのがメスである。網に描かれたX字は「隠れ帯」と呼ばれており、種類によってその形が違う。

コガネグモのオスは一生に二回だけ交尾をすることができる（「触肢」という、交尾に必要な器官を二つ持っているのだが、一回使うと折れる）が、行為に１０秒以上かかるとメスに食べられてしまう。

井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

2023年6月25日

＊ピンコロの土台ができたら、２５mm～６０mmのビスとインパクトだけを使って骨組みをつくっていく。今回、このためにアトリエで余っていた木材を大量に車に積んできた。おかげで木材はほとんど買わずにすんだ。

井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

2023年6月25日

＊コンポストトイレなので、穴も掘った。深さは約６０cm。ここに排泄物が入り、用を足したあとは上から「落ち葉を細かくしたもの」と「木クズやくん炭」を混ぜたものをかけて、微生物に分解させるという簡単な方式。穴がいっぱいになったときのことを考えてなかった、という恐ろしいことに、ここまでやってから気がついてしまったが、いまは考えないことにする。

ハイライト２：現場監督ねこ

＊作業の途中、裏の滝口さんちの黒猫がおもむろに近づいてきた。気にしていないふりをしつつ横目で見ていたら、なんと黒猫は私の目の前のコンクリートブロックに座り込んだ。まるでこの道数十年の現場監督のような雰囲気を湛えながら、黄色い目でこちらを観察している。こいつが私のシシャモを食べたに違いない（報告書第六号参照）と思った。現場監督は数分間滞在すると、私の仕事ぶりに満足したのか、またどこかに消えていった。

井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

2023年6月25日

＊穴の上に、ポリバケツの底をグラインダでくり抜いて逆さまにしたものを固定。この時点で１８時。今日の作業終わり。今日の風呂は「湯楽の里」へ

＊湯楽の里。日曜日に来た前回ほどではないが、そこそこ混んでいる。空腹が限界なのでまず食堂に入り、テーブル備え付けのタッチパネルの「画面中央をタッチしてください」という指示の通り画面中央のオレンジ色の丸をタッチし、最初に開かれた「サウナ飯フェア」（サウナ飯とはなんだろう？）の中でぱっと目についた石焼海鮮あんかけご飯（上図）を速攻で選び、タッチパネル横の白い的のようなマークに受付で渡されたリストバンドをかざして注文を完了、と同時に後ろの席にすわっている一人客のおじさんのもとに瓶ビールがリザーブされる。すぐにおじさんの「これ開けるやつは？」と店員に尋ねる声がする。栓が閉まったままらしい。「申し訳ございません！」と店員の声。「やろうと思えばできんだけどさあ」と、おじさんがだみ声で返す。圧をかける感じではなく、店員に笑いかけるような口調。栓抜きがない瓶ビールをどうやって開けるのだろう。私なら鍵を使ってあけるが、おじさんはどうするのだろう。などと想像する。真後ろなのでおじさんの顔はわからない。お腹がすいて倒れそうだ。

井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

2023年6月25日

＊石焼海鮮あんかけご飯、うまい。滝口さんのいう通り、湯楽の里はご飯もおいしい。塩加減強めで、疲れた体には最高である（これがサウナ飯たるゆえんか）。ぐつぐつと石のお椀のなかで煮えたぎっている。熱い。めちゃくちゃ熱いが、とまらない。この米、ホタテ、白菜、イカ、にんじん、お椀と、それを載せる木製の台、その台に打たれたビス。うまい。私はいま、あんかけご飯を抱えながらキーボードを打っている。行儀が悪い。だけどなにかが降りてきそうだ。疲れているけど、ここにはなにかある。この塩はどこのものだろうか。どこか遠くの国で採れたものなのか、人工的に作られたものなのか。それを私は食べる。この場所に住むということ。台湾の建築家Field Office Architectureの本のタイトル『Living in Place』に込められたPlaceの意味を考えること。人間は、他の人間はもちろん、経済、システム、動物、虫、菌、空気、気分、天候と共に生きるのだ。全てと共に住むのだ。見渡せ。そこから全てが見えるはずだ。見えていないのなら、考えていないだけだ。すべてのなかに、すべてが包まれている。すべてがすべてと繋がっている関係の網目がそこにあるはずだ。この箸。箸を包む紙袋、テーブル、椅子、その光沢、私がこのレストランの椅子に座っている、ということが指すもの。すべてはすべてとの関係のなかで生まれ、いま私の目の前にある。私が指先を動かすだけで、世界がすこし揺らぐ。そんな網の目の中で生きている。あのコガネグモの巣のような。あるいは魚が水中で生きるのとおなじように生きている。人間ならば。あんかけが熱い。食べ終えた。熱かった。熱いものを食べる、というのは結構大事かもしれない。脳のリミッターをいかにして外すか、は制作において重要なことだが、熱いものを食べるのはいい起爆剤になるかもしれない。

＊風呂から上がり、湯楽の里のロビーのソファに座ってパソコンを開いている。コミックコーナー、新聞・雑誌コーナー、チラシコーナー（千葉で勉強ができない子なら僕にお任せください！）。クレーンゲーム内のカービィ。昨日の日焼けが沁みて痛いので、腕を湯の中に入れられないほどにはしょっぱい温泉だった。茶色くて、その色は村上勉強堂の井戸水を思い出させた。この温泉は遥か2000メートルの地下深くから掘り出された水で、村上勉強堂のは10メートルにすぎないが、同じ地下からの水であることを思った。裏の滝口さんの話によれば、30メートルくらい掘れば水が透明になるという。ということは、10メートルくらいまでの水は茶色くて、30メートル前後になると透明になり、2000メートルまでいくと再び茶色くなるということか。いったいどうなっているのか。地中に土やら岩盤やらがあり、そこに水が染み込んでいて、その色が深さによって変わるとは、いったいどういうことか。武蔵野美術大学の近くにある、課題提出後など自分を労りたい時にいっていた「テルメ小川」は1600メートルの深さから汲み上げている温泉だが、色は黒かった。なにが水の色を変えているのか。深さによって違うのは、なぜなのか。

　さきほどのあんかけご飯で舌の奥を火傷したらしく、ひりひりする。サウナのテレビでは例によってバラエティ番組が流れていた。京都かどこかのいわくつきのトンネル近くの峠の上にある、謎の「下を向いたカーブミラー」の真相を推理せよ、というVTRが流れ、桜井日奈子氏が回答を求められ「自分の頭頂部を見るため」と答えていた。「本当にそう思っているのか？」と思った。それから「本当に、そう思っているのか？」とは、まるでジョジョの奇妙な冒険みたいなセリフだ、と思った。それから、こんな日常にまで入り込んでくる、ジョジョはほんとうにすごい作品だと思った。風呂から上がった直後は顔面の住人（鼻）がせっせと水を排出していたが、髪を乾かしたり着替えたりしているうちにおさまってくれた。明日は友人のK氏が勉強堂の現場を手伝いに来てくれる。ちゃんとした来客は初めてかもしれない。お茶を出したいが、まだ茶色くて鉄の匂いがする井戸水しかないので、お茶はコンビニで買う既製品になるだろう。紙コップも用意しなければならない。なんたって明後日も別の人が手伝いに来てくれるのだ。

というようなことを、23時10分前、蛍の光が流れるまでロビーで書いて「湯楽の里」を脱出。帰りにコンビニに寄り、日焼け止めを購入。

井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

2023年6月25日

６月１５日

＊８時４０分。セブンイレブン。日焼けで両腕がひりひりする。「ごろっと揚げなす（味噌汁）」と「牛そぼろ（おにぎり）」とアメリカンドックと「カントリーマアム バニラ＆ココア」と、来客用に1.5Lペットの緑茶と紙コップを買い、レジ横の保温ポットが置かれた台の上で味噌汁のビニールを剥がし蓋を開けて「みそ汁の具」と「調味みそ」をカップに流し込みお湯を入れて蓋をし、車に戻って朝食。

＊９時２０分。現場。夜通し降っていた雨もいまは上がっている。

＊トイレ制作の続きの前に、井戸を完成させた（左図）。コンクリートブロックを井戸枠を挟むように置き、木材を組み合わせて土台をつくる。塩ビパイプと木材との隙間は、エアコンの管と壁との隙間をうめるパテで埋めた（下図）。井戸の中に異物が入らないようにするために必要で、エアコンパテは完全に私の思いつきだが、しばらくこれで様子を見る。疲れているのか、体がだるい。おそらく日焼けのせいもある。日焼けは疲れる。ダメージが蓄積される。

＊１２時ごろK氏が到着。トイレ制作を手伝ってもらう。昨日作った骨組みに、合板（東京でシェアスタジオをやっている友人からもらったもの）をビスでとめていく（左図）。K氏のおかげで、作業が驚くほど進む進む。

屋根材だけは木で作るわけにはいかないので、コメリまで硬質塩化ビニールの波板を買いにいった（左図右下）。

井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

2023年6月25日

＊同時に便座の下敷きになるパネルを作る。はじめはジグソーで切り出そうと思ったが、案の定12Vの電力では動かなかったので、丸ノコで大きく切り出してから手ノコで形を整えた。

＊途中K氏が、もともと田んぼだった空き地の向こうに生えていた木を指して「あの木、ひとりだけやる気満々みたいでいいですね」と言った（下図左）。そこから植物の話になり、現場の斜め向かいの空き家に生い茂っている植物（下図右）の話題に。写真だとわかりにくいが、庭に植えられた樹木が敷地境界のブロック塀を超えて隣の土地に乗り出しており、乗り出した先の土地の植物たちと手を取り合うようにしてブロック塀を覆っている。人間の文明よりも寿命が長い植物たちは、人間が作った住所という概念を超えてくる。

私は昔、『あの日からの或る日の絵とことば』（創元社 www.sogensha.co.jp/productlist/detail?id=3960）という本の中で、「住所に生えている木」という文章を書いたことがある。

> ––家には住所というものがあるけど、あの震災後、僕は津波で家が流されてしまった住所をたくさん見た。そこには植物が生い茂っていた。（中略）人は住む生きものなので、住所というものが必要だが、木は住む生きものではない（「木が住んでいる」とは言わない）。木はただ生えている––

長いので全ては引用しないが、ここで私は、ある敷地内に生えてしまった木は、その土地の所有者の所有物になる、ということの不思議さについて書いた。

また、「住所に生えているケヤキ」という作品も作ったことがある（右図）。これは東京のアトリエの庭に生えていたケヤキに、アトリエの住所を彫刻刀で彫り込み、さらに庭師に協力してもらってそのケヤキを庭から引き抜いてプランターに植え替えてギャラリーで展示するというもの。

まだうまく言語化できないが、ある敷地内に生えた木が、その敷地の外に出ていくとはいったいどういうことなのか、とても興味がある。

幸い「勉強堂」の近隣には空き家が多く、所有者が誰なのかわからなくなっている木がたくさんある。この問題は引き続き考えていきたい。

井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

2023年6月25日

＊作業の途中、ふと手がウンコ臭いことに気がつく。かなり人間のそれにちかい、哺乳類の糞のにおいである。土をいじっているうちに、どこかで触ってしまったらしい。まったく気がつかなかったし、手についたあとでもなにが「ソレ」なのか判別できないのに、匂いだけが強烈に残っている。実は以前にも同じことがあった。犯人は間違いなく、あの現場監督である。

＊５時半ごろに作業がひと段落し、K氏を駅まで送った。人がいると、作業スピードが３倍にも４倍にもなる。手が増えるというだけではなく、ひとりだとつい無駄にとりがちな「ちょっと一息」が減り、作業を進めなければいけない、という気持ちが高まる。そしてK氏はインパクト打ちが非常に早くて性格で、ものすごく助かった。

ハイライト３：おさき～

＊K氏を送ったあと、馴染みのクリーンセンター入浴施設へ向かった。入り口で利用者カードを見せて、４００円を支払う。以前は８００円払っていたが、前回からは山武市のひと、ということになり、安くなった。

山武市のひとになってみると、８００円支払っていたころには受付で毎度のように言われていた「高くてすみませんねえ」というセリフと、そこからのお決まりの「こっちのほうに仕事場とかはないんですか？」みたいな会話のきっかけがなくなり、普通にお金を払うだけの事務的な関係になった。金額が安くなったことはうれしいが、このささやかな会話が失われてしまったことは一抹のさみしさがある。なんて書くくらいなら、自分からどんどん話しかければいいじゃないかとも思う。次回はすこし話しかけてみよう。

＊脱衣所には荷物が一人分だけ置いてあったので、誰か先客がいるなとは思っていた。でもまたお決まりのひとに出くわすとは思っていなかった。例の入れ墨のおじさんだった。おじさんは私が湯船に浸かっているときに露天風呂のほうから現れ、体を洗い始めた。まだ明るい外の光が浴室に差し込み、入れ墨を照らしている。思わず背中を見てしまう。ドラゴンと、鳳凰のような神々しい鳥と、怖い顔をした虎が３体並んで肩のあたりに彫られている。背中には不思議な抽象的な模様も見える。かっこえ～な～、となぜか関西弁で私は思った。あんまりじろじろ見るのも失礼なので、それ以降は控えるようにして、おじさんが体を洗っているときには露天風呂に行き、おじさんが浴室から出たら体を洗いにいく、というふうにして、なんとなく距離をとっていた。そのほうがお互いにとって気を遣わなくてすむのではと思った。

風呂から上がり、脱衣所に行くと、おじさんは鏡の近くにある扇風機の前に座って涼んでいた。私は体を拭き、パンツを履いて、持参したドライヤーを洗面台脇のコンセントにさし、髪を乾かしはじめた。そのとき、おじさんが荷物を抱えておもむろに立ち上がり、私に「おさきー！」 と、ドライヤー越しでも聞こえるほどの大きな声で挨拶をしてくれた。

私はびっくりして「おつかれさまです！」と、若頭への挨拶みたいなことを口走ってしまった。「おつかれさまです」はおかしいだろ、とすぐに思ったが、遅かった。しかも私はあわてていたので、正確には「あ、お……おっつくっす！」みたいな発音になっており、かなり挙動不審だったと思われる。だがおじさんは気にするそぶりもなく、脱衣所を出て行った。

髪を乾かしながら、じわじわと嬉しさが込み上げてきた。もう３、４回はこの入浴施設で目撃している（一度は他の客との口喧嘩～仲直りの現場にまで立ち会った）、名物客のおじさんに認知してもらえた可能性がある。「まんまや」に続いて、常連客に一歩近づけたかもしれない。ほんとうに、ひとりでにやにやしてしまうほど嬉しくて、すぐに出るのがもったいなくて、施設のロビーでコーヒー牛乳を買って飲んでしまった。それにしてもおじさん、どれだけの頻度でここに通っているんだろうか。いつも一人で来てるけど、家族はいるのだろうか。

井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

2023年6月25日

＜とつぜんの音楽紹介コーナー＞

上記のような、「別に何もなくても人生は進んでいくが、それがあると一日がすこしハッピーになる」ような現象のことを「8Ball」と呼ぶ（一般的な呼称ではない。たんに私がそう呼んでいるだけである）。これはUnderworldという音楽ユニットの曲名に由来する。とても好きな曲なので、この機会に紹介したい。サウンドもすごくかっこいいのだけど、歌詞がすばらしくて、上記の「すこしハッピー」現象も、その歌詞に由来する。

歌詞はとてもシンプルである。９分弱ほどの曲なのだけど、前半の５分は以下の繰り返しに終始する。

「Today Today……」

「Today I saw a man」

「using an empty whisky flask as a walkie talkie」

「Today Today……I saw a man」

「With a flaming 8 ball tattooed on his arm」

「今日、男を見かけた」

「そいつは、空のウイスキーボトルをトランシーバーとして使っていた」

「燃える８Ballのタトゥーを腕に入れていた」

ちょっと変なひとっぽいだけど、面白そうな男を見かけた、という内容である。「flaming 8 ball tattoo」で検索すると、どんなタトゥーか想像が膨らむ。なにか特別な意味が込められている可能性もあるがよくわからない。前半５分はとにかく上の歌詞を繰り返す。

４分４４秒のあたりから、曲調が少しずつ変わっていく。ベースの音に加えて、何かが始まりそうな、明るいギターのアルペジオとストリングスが差し込まれ、キラキラとした多幸感あふれるキーボードと手拍子も加わる。

しばらく間奏が続き、こんな歌詞で後半が始まる。

「Today I met a man」

「ある男を見かけた」から「男に会った」に変わっている。

「Who threw his arms around me」

男は腕を回して抱きついてくる。8Ballのタトゥーを入れた男と同一人物とみて間違いないだろう。この時点で曲が始まってから７分が経過している。いよいよ盛り上がってきたサウンドも相まって、この「男が腕を回してきた」という一度の触れ合いが、ものすごく壮大なことに感じられる。

「Today Today Today」

「We laughed」

「We laughed」（Waited for a train）

「For a few seconds」（into the city）

「That great stuff」

「That great stuff」

「That stuff makes me feel」

「feel」

「Happy」

最後の最後で「ハッピー」という言葉を一度だけ叫んで、曲はふいに終わる。歌っている内容は要するに

「今日、燃える８Ballのタトゥーを腕に入れ、空のウイスキーボトルをトランシーバーとして使っていた男を見かけた」

「男は私に腕を回してきた」

「私たちはほんの数秒間笑いあった」

「それはとてもよかった。とてもよかった」

「わたしはハッピーだった」

という、ささやかなふれあいである。Underworldはこれを９分の歌にしている。

井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

2023年6月25日

音楽は、作るのに時間がかかる。３分の曲をつくるのに何日も何週間も何ヶ月もかけたりする。その音楽というメディアで、その日起きた数分間の出来事（不思議な男と出会い、笑いあった）を曲にすること。「あのとき、ハッピーだった」と、９分もかけて歌うこと。そして曲になるということは、ライブのたびに何度も歌うということでもある。数分間の出来事を、何度も繰り返し観客に向かって歌うことになる。ささやかな一瞬を大切に扱い、繰り返すことで、永遠のものに変えていく。

そして私には「ちょっと変だけど陽気な人に腕をまわされて、一緒にちょっとだけ笑って、すごくハッピーだった」という気持ちが、なんだかわかる気がするのである。「それは嬉しいよねえ」と心から共感できるのである。すごく特別なことかというとそうでもない。たまにありそうなことだ（ウイスキーをトランシーバーにしてるひとは珍しいかもしれないけど）。特別ではないことだからこそ、突き詰めると誰にも真似できない表現になってしまうという魔法が起こる。音楽はいいなあ。

＊晩御飯に「ムファ ハラールレストラン」という、最近できたばかりらしいスリランカとインド料理の店へ。道路に向かってビームライトみたいに強烈な照明が発射されており。めちゃくちゃ眩しい。店内はがらんとしており、最低限の設えという感じ。テーブルと椅子、ソファ席、白い壁と白い天井、BGMもなし。人が店内を歩く度にちょっと揺れが伝わってくる。

他に二人ほどの客、スリランカ人と思われる。聞こえてくるのはすべて、まったくわからない言葉。急に異国に来たみたいだ。私はマトンビリヤニ、マンゴーラッシーを頼んだ。

「マトンビリヤーニいっこ、マンゴーラッシーいっこ……オーケイ」

と、店員のお姉さんが復唱してくれる。すぐにマンゴーラッシーがきて、「ありがとうございます」と言ったらお姉さんは黙って厨房のほうに戻っていき、「ありがとうございます〇〇△△」と、厨房内のひとと「ありがとうございます」という言葉についてなにかを話している。気になる。

＊店には次々とスリランカの方々が入れかわり立ちかわり入ってきて、ご飯を食べたり、店員と雑談したりして出ていく。もはや誰が店員で誰が純粋な客なのかもわからない。完全にコミュニティスペースになっている。わたしはひとり黙々とマトンビリヤニを食べる。だけどとても量が多くて、食べきれない。手をあげてお姉さんを呼び、「持って帰れますか」と指をさして主張したらお姉さんはにこりと頷き、すぐにタッパーを持ってきてくれた。ビリヤニについてきたカレーソースと、白くて酸味のあるソース（後に調べたらライタというものらしい）を入れるためのビニール袋２つも笑って渡してくれた。私がたどたどしくソースを袋に移していると、お姉さんは近づいてきて、袋の口を慣れた手つきで縛り、ソースが溢れないようにしてくれた。終始無言で、だけど親密な感じ。とてもよかった。８Ballだった。

＊のちに調べたら、山武市はスリランカの「ホストタウン」になっており、ウェブサイトには日本語と英語の他にシンハラ語が併記されている。市としてスリランカとの交流に力を入れているらしい。人口減少が続く山武市だが、スリランカ人の人口はここ１０年で１３倍になっているというネット記事もあった。このあたりのことはいずれ詳しく調べたい。

井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

2023年6月25日

６月１６日

＊昨日のマトンビリヤニを朝ごはんに、１日を始める。今日はアーティストの白田氏が手伝いに来てくれる。とても尊敬しているアーティストのひとりで、まさか手伝いを申し出てくれるとは思っていなかったので、ちょっと緊張する。

＊１１時に日向駅まで白田氏を迎えにいき、すぐにトイレ制作の続き。

＊余っていた合板のふたつの長辺に垂木を打って補強し、一方に蝶番をつけて即席のドアをつけ、それを柱にビスで打ちつける。それから、壁のあちこちにできていた隙間を角材で埋めていき、中が見えないようにした

白田氏はやはりアーティストなだけあって、「俺ならここ気になっちゃうけど、どうする？」と、私の雑な仕事にいろいろを意見をくれた。こまかいところでやり方の違いがあり、これがけっこう面白い。

それと白田氏は、鉄筋にガンガンあてながら使っているせいで刃があちこちひしゃげてしまっている草刈機のブレードを見て、「自分の後輩が仕事の現場にこんな道具を持ってきたらぶっとばす」と笑っていた。びびった。

井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

2023年6月25日

＊昼ごはんは、近所のモスクで礼拝がある金曜日のお昼しかオープンしていないという噂の「ユスラレストラン」（メニューはマトンビリヤニだけ）に来た。昨日もビリヤニだったが、好きなので問題ない。店構えがとてもかわいい。

＊「開いてるかな～」と、車で店の前をゆっくり通りかかってみると、中から絵に描いたインド人みたいなおじさんがでてきて、大げさに手招きしてくれた。さらに「車はそっち！」と言って、駐車場まで歩いて案内してくれたのだが、店に入ってみると、このおじさんはべつに店員ではなかった。

　イタリア人みたいなノリのお兄さんが「何食べる？　マトンビリヤニとナンがあるよ！」と、すさまじい勢いで捲し立ててくる。私たちはふたりともビリヤニを頼んだ。

　店内はスリランカ人らしき人々で混雑しており、昨日に続いて唐突に異国に放り出されたような感じ。すぐにマトンビリヤニ（でかい唐揚げつき）が運ばれてきて、わたしは普通にスプーンで食べはじめたのだが、白田氏はまわりに合わせて右手ですくって食べていた（が、のちに「食べにくいわ」と言ってスプーンに切り替えていた）。「どうおいしい？」「食べきれなかったらタッパーあるよ！」「どこからきたの？　近所？」「ゆっくりしてね！」とお兄さんが頻繁に声をかけてくれ、楽しそうに談笑するスリランカ人らしき人々の声を聴きながら、わたしたちはマトンビリヤニを食べる。遠方からわざわざ訪ねてくる人もいるという名物ビリヤニ、おいしかった。私は食べきれず1/3ほど持ち帰ったが、白田氏はすべて平らげていた。この店も昨日の「ムファ」と同じく、誰が客か店員かわからない感じで入り乱れており、コミュニティスペースになっているようである。いままで来る機会がなかったが、どうやら金曜日以外にもやっている日があるようなので、今後は通っていきたい。

井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

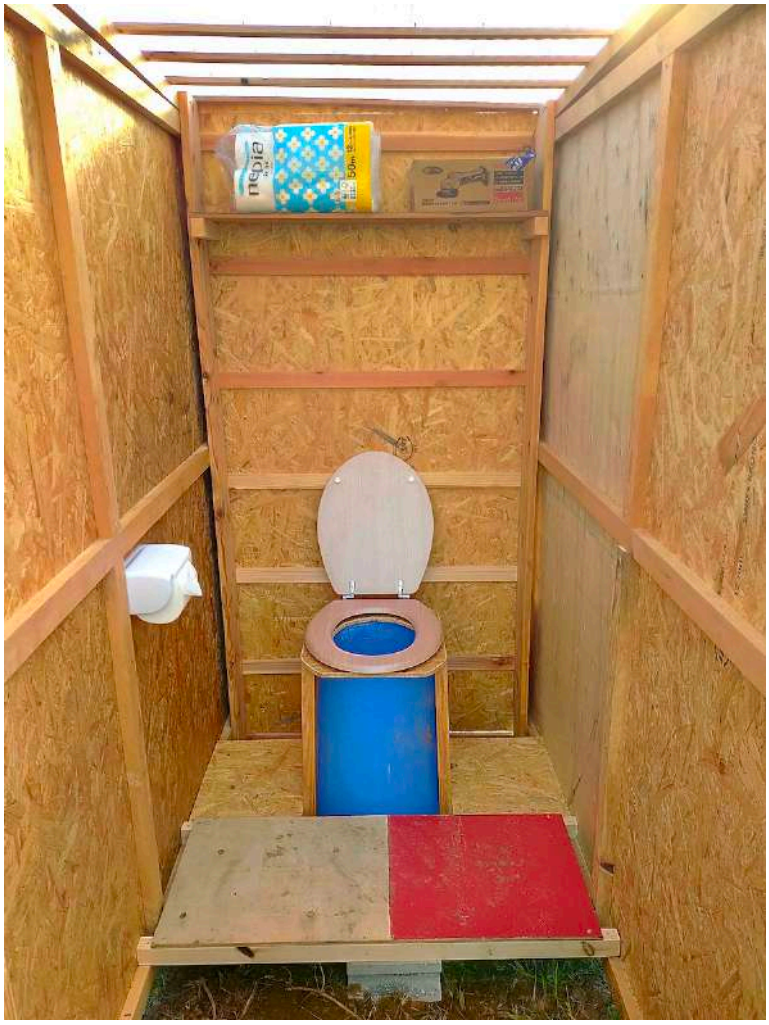
2023年6月25日

＊トイレ制作の続き。「楽天市場」で４０００円で買った木製便座を、合板とひっくり返したポリバケツで作った即席便器にボルトで取り付ける。これだけで立派なものに見える。

＊最後にコメリで買ったトイレットペーパーホルダーを壁にビスで打ちつけ、棚もつけて、トイレが完成（下図）。夏はかなり暑そうで、もしかしたら後々窓をつけることになるかもしれないけど、けっこうかわいいトイレになった。

下に敷いている合板の赤は、友人のアーティストからこれを譲ってもらったときから塗られていたものである。それが、ちょうどポリバケツの青とマッチしていい感じになっている。

「こうなってくると黄色も欲しいなあ」と、トイレが完成した時点で白田氏が言っていたのだが、なんと買ってきたトイレットペーパーの袋に黄色が入っていた。



井戸とトイレの完成、銭湯での出来事と音楽、現場監督ねこ

作成者：村上 慧

2023年6月25日

＊トイレが完成した時点で午後５時。現場を片付けて、３泊の滞在が終了。

＜とつぜんの主張コーナー＞

近くに綺麗な川が流れている森の中とか、新鮮な空気と野生動物がいる山の中とかではなくて、千葉県の住宅街の土地で、コンポストトイレを作ったり井戸を掘ったり、版築の小屋や、落ち葉の発酵熱の暖房や、井戸水の気化熱の冷房を作ろうとしていることについて、すこし書いた方がいいかもしれない。

私は小屋暮らしとか、自給自足とかがやりたいわけではない。理想的には、大都市の市街地でたまにみかけるような、ぽかんと歯抜けした空き地を買ってプロジェクトをやりたかったのだが、お金がないので日向にいきついた（それはそれでよかったと思っている）。もっと安い金額で、どこまでが自分の土地なのかわからないくらい大きな山の中の土地を買うこともできたが、そうはしなかった。すぐ近くに、ごく普通の住宅や街の暮らしがある場所で、土をかためて壁をつくり、暖房と冷房を自作するということがやりたかった。そんな環境で、誰もが驚くほど快適な冷暖房環境を整えたい、と思った。

私は街が好きだ。スーパーやコンビニが好きだし、映画館も美術館も本屋もショッピングモールも楽しい場所だと思っている。そんな街のなかにおいて、街の享楽も享受しながら、そのシステムの中でだけ生活するのではなく、「自然が勝手にやってくれること」を見極め、より根源的な仕方で住み方をつくっていく、ということがやりたかった。それは、街の生活のすぐ隣で行われなければならない。そうでないと、私がやる意味がない。

ヘンリー・デイヴィッド・ソローは『森の生活』において、森の中で自作した小屋に住んでいたが、目は街を見ていた。街にすむひとたちについての皮肉を言ったり、洗濯はひとに頼んでやってもらっていたりもしていた。その態度を、私は街の中で実践したい。本のタイトルに寄せるなら、私は「空き地の生活」がやりたいのである。

おわりのひとこと

現状では地面が、草の根っこやら、土の盛り上がりやら、刈った草の山やらでデコボコで、歩くだけで体力が削られる気がする。次はユンボを借りて駐車場を作ろうと思っているが、ついでに土地を平らにならす工事もやっていきたい。

駆け足で書いたつもりの本号だが、終わってみると２６ページもある。また気長に次号を待っていただけると幸いです。

文責：村上 慧